

## 感情表出と学校適応の相互因果関係—学級の感情風土による調整効果に着目して—

利根川明子（東京大学大学院教育学研究科 大学院生）

## 問題と目的

従来の教授学習研究では、教授学習の認知的プロセスが重視される傾向にあり、児童が抱く感情の役割に着目した研究はあまり行われてこなかった（e.g., Meyer & Turner, 2007）。しかし、近年では、教育の文脈における感情の重要性が指摘され、科学的なデータに基づく教育への応用が行われることが望まれている（文部科学省, 2014）。本研究では、学級での児童の感情表出と担任教諭やクラスメイトからの感情サポートの両面に着目し、児童の学級での主観的適応感、学習に対するエンゲージメント、いざこざ行動、学業成績の自己評価、といった種々の学校適応指標との関連を検討することを目的とする。具体的には、第一に、複数時点での縦断調査により、児童の感情表出、学級内の感情サポートと、種々の学校適応の間の相互因果関係を検討する。第二に、これらの関係に対する学級全体の感情風土の調整効果について検討する。

なお、本研究では、学級の感情風土に絡む要因として、従来中心的に扱われてきた（1）担任教諭やクラスメイトからの感情サポートと、（2）学級に所属する児童の感情表出の両面を取り上げる。

## 方法

**調査協力者と手続き** 1都2県の公立小学校6校（32学級）に所属する4—6年生とその担任教諭を対象に、2017年7月（1時点目）、10—11月（2時点目）、2018年2—3月（3時点目）の3回にわたり質問紙調査を実施した。少なくとも1回の調査に参加した児童は958名（男児522名、女児435名、無回答による性別不明者1名）であった。担任教諭32名（男性19名、女性13名）の平均年齢は41.59歳（ $SD=11.28$ 、レンジ：24—60）であり、教師経験年数の平均は18.31年（ $SD=10.83$ 、レンジ：2—38）であった。また、質問紙調査結果を考察する際の補助的情報を得る目的で、質問紙調査の対象となった学級のうち、授業観察の協力を得られた12学級を対象に、授業場面の参与観察を行った。参与観察時は、研究者1名（2学級のみ2名）が1時間授業参観し、ビデオカメラならびにICレコーダによる映像記録・音声記録を行った。

**児童質問紙** a) **教室での感情表出** 坂上（1999）の感情語を使用し、「ポジティブ感情」（喜び、興味）と「ネガティブ感情」（怒り、悲しみ、恐れ）について、学級の中でどの程度表出するか尋ねた。 b) **感情サポートの知覚** Patrick, Kaplan, & Ryan（2011）のemotional support尺度の項目を参考に、学級における担任教諭からの感情サポートとクラスメイトからの感情サポートについて尋ねた。 c) **学級適応感** 江村・大久保（2012）の小学生用学級適応感尺度を使用した。 d) **エンゲージメント** 日本語版エンゲージメント尺度（梅本・伊藤・田中, 2016）を使用した。 e) **いざこざ行動** 学級内でのいざこざ行動について尋ねた。 f) **学業成績の自己評価** 学級内での学業成績について児童に自己評定を求めた。

**教師質問紙** a) **学級の児童の感情表出** 児童質問紙と同様の項目を用いて、担任教諭から見たときの学級の児童全体の感情表出の頻度を尋ねた。 b) **児童への感情サポート** Patrick et al.（2011）のemotional support尺度の項目を参考に、担当学級の児童に対する感情サポートの程度を尋ねた。

## 結果と考察

**児童の感情表出、感情サポートと学校適応の相互因果関係** 交差遅延モデルによる分析を行った。その結果、ポジティブ感情表出、担任教諭からの感情サポート、クラスメイトからの感情サポートについては、学級適応感、エンゲージメント、学業成績の自己評価を促進するだけでなく、学級適応感、エンゲージメント、学業成績の自己評価が高いことで、ポジティブ感情表出や感情サポートの知覚が促進されるという双方向の影響関係が示された。ネガティブ感情表出については、ネガティブ感情表出の多さが学級適応感とエンゲージメントを低下させ、いざこざ行動の多さを促進するが、逆方向の影響関係については、いざこざ行動の多さのみ、ネガティブ感情表出を促進するという一部双方向の影響関係が示された。

こうした感情表出、感情サポートと学校適応との間の相互因果関係は、実際の授業場面での相互作用観察からも示唆された。

**学級レベルの要因の検討** マルチレベル分析を行った結果、学校適応に対する児童レベルの感情表出、感情サポートの効果は学級によらず一様である可能性が示唆された。つまり、感情風土による調整効果は見られなかった。また、学級レベルの要因として、ポジティブ感情表出の多い学級に所属することが児童らのエンゲージメントを促進し、担任教諭の感情サポートが多く知覚される学級に所属することが、児童らの学級適応感とエンゲージメントを促進することが示された。